

長島由佳 ながしまゆか

活動地域：茨城県常陸太田市

支援可能な地域：全国（主に関東圏希望）

現在の所属（役職）

一般社団法人 常陸太田市観光物産協会
教育旅行・民泊地域コーディネーター

アドバイザー可能な分野

観光振興・交流事業

住民自身の地域への誇り創出の為の地域資源の利活用

持続可能なコミュニティ力底上げの為の場づくり

地域での活動

茨城県内初の地域おこし協力隊として、東京の清泉女子大学地球市民学科卒業生3名で2011年4月に着任しました。2012年には同大学卒業生がさらに2名追加、2013年10月からは男性隊員も加わるなどし、以来昨年度末まで『Relier（ルリエ）』（フランス語で「つなぐ、むすぶ」の意。）というチーム名で活動しました。（常陸太田市地域おこし協力隊に関しては昨年度末で私を含む4名が任期終了、同大学卒業生2名がさらに追加され、現在4名で活動しています。）

任期中、主に「地域内ネットワークの構築」「コミュニティ・ハブの確立」「食を中心としたスモールビジネスの構築」「情報発信」等に取り組みました。

「地域内ネットワークの構築」に関しては、人口減少や高齢化が進む中で希薄化している20代～40代までの若者の横のつながりを作るため、ゆるやかに人と人が繋がる場として「里美の夢を語ろう会」を定期的実施。その中から出てきたアイデアを地域住民と共に実際に計画・実行

し、住民自身の夢ややりたいことを目に見える形で実現することで、主体性を持って地域社会と関わる人材づくりや未来を担う次世代のコミュニティづくりを行いました。具体的なプロジェクトの一例としては、常陸太田市里美地区の森林や水保全を目的とした一連の活動を行う任意団体「里美の水プロジェクト」を地域住民と共に立ち上げました。「ツタエル・マナブ・ハグクム」をコンセプトに子どもたちや近隣地域住民への森林散策を通じた環境啓発事業やワークショップ、また、里美地区の水を使用し開発した「里美珈琲」の販売を通じてその売り上げの一部を啓発活動に使用するといった持続的・自立的取組を行いました。地域のお土産品が数少ない中、地区名の入った商品として好評を得、今年度で第三期に入ります。地域住民誰もが誇りとしていた美味しくきれいな水を商品として可視化

し、金銭的価値を付けるという新たな視点と取り組みが、地域資源を地域内外の多くの人で共有するツールとしても確立することができました。同プロジェクトの他、地区内イベント「里美の日」や後に説明するコミュニティ・ハブとしての「one-day café 里美の休日」等、多様な人を巻き込んだプロジェクトが興り、現在も続いています。

これらの成果としては、商品化や継続的なイベントの定着を目に見える成果として残すことができたことに加え、どのプロジェクトを進行するにあたって地域住民が主体となり、プロジェクトや地域のことを“自分ゴト”として認識し、主体的に地域社会と関わる意識醸成ができたことだと感じています。本来、今後の地域を担っていく本人である地域住民自身が意識的、主体的に行動を興していくことで、外部者である協力隊等の人材と連携した持続的で有意義な活動を行うことができると感じます。

さらに、「コミュニティ・ハブの確立」ということで、地域内外の人やコトの交流を促す実際の場として、地元 NPO が運営・管理をしていた古民家を、より多くの地域内外の人が集まり、幅広い活動に活用できるよう同 NPO と連携して整備を行いました。その活動のひとつとして先に挙げた「one-day café 里美の休日」があります。これは地域の有機農家と連携した月 1 回の定期的なコミュニティ・カフェであり、口コミなどでリピーターや新規顧客が増えてきています。地域内の情報を得る場所・地域内外の人の交流を図る場所をすることで地域のファンづくりを進め、運営スタッフにも地域内外の住民を迎えることで、地域事情に見合った自発的な場づくりを住民自身が継続的に行うことを可能にしました。

「食を中心としたスモールビジネスの構築」に関しては、地域の歴史や文化に裏打ちされた地域資源である家庭料理に着目し、季節ごとのレシピ集を作製したり、家庭料理を教わる料理教室ツアーを行ったり、期間限定でレストランを開催したり、地域の産品とレシピを合わせて販売する為の地盤作り等に取り組みました。地域女性の持つ知的資源や食に関する地域資源を活かしながら、協力隊としては調整役に徹することで、住民自身が地域の価値を自覚し誇りを醸成する土台ときっかけ作りができました。今年度以降もこれらの取り組みは相互に有機的な繋がりを持ち、事業化する形で発展させていく予定です。

最後に、「情報発信」に関しては Relier のチームとして連携しながら取り組みました。ニュースレターや広報誌などの紙媒体を活用し定期的（月 1 回程度）に発行して地域内での協力隊の存在や活動の認知度向上に努めました。また、地区外に対してはブログやフェイスブックなどの SNS を活用しながら日々地域の魅力や情報を発信し、ブログは 1 か月平均 17,000 アクセス、フェイスブックは 1125 いいね（2014 年 3 月現在）を獲得しています。その他北関東圏に閲覧者の多いウェブマガジンへの連載、毎週の地元新聞への連載、TURNS やソコトコ等の全国区雑誌等、『僕ら地域おこし協力隊（矢崎栄司・編著/学芸出版社）』への掲載、NHK 等の全国区も含めたテレビやラジオ出演等を併せると、3 年間で 1 億円以上の広告費換算（平成 24 年度常陸太田市役所算出データに基づき、協力隊自身で換算）になります。また、平成 18 年度から茨城県で実施している、「いばらきのイメージアップ」や「地域の元気」につながる幅広い活動を応援し、元気ないばらきづくりを推進するための「いばらきイメージアップ大賞」にて、「常陸太田市地域おこし協力隊 Relier」として平成 25 年度奨励賞を受賞しました。これら情報発信に関する取り組みに関しては、いつでも地域の情報を惜しみなく提供してくれた外部者を受け入れる寛大な地域住民と、住民にはない目線で既存の枠組みに捉われず横断的に様々なチャレンジを行う外部者としての協力隊が

うまく融合しながら、それぞれの役割を全うした上での成果と言えるでしょう。

結果、昨年度で任期を終える私を含めた4名の隊員はいずれも市内に定住し、一地域住民として地域との関わりを持ち続けて行く道を選択しました。「地域おこしとは何か」という問いに対して、活動しながら様々な仮説を立て、それに対して多様なチャレンジを行ってきました。私を含めた協力隊員は、任期中一貫して、地域での活動は「地域の人が主役」であり、どの活動も「地域の誇りを醸成する」ことを目的に行ってきました。それが、「地域おこしとは何か」という大きな問いに対する私たちの仮説の一つでした。さらに、その「誇り」に関して、以下のように整理しています。

●地域の誇りとは何か

→一人ひとりが「住んでいて良かった、住み続けたい」と思えること

●地域の誇りがなぜ必要か？

→誇りを持つことが地域を維持する原動力となるから。

●地域の誇りが醸成されることで待っている未来

→一人ひとりが地域の真の価値や可能性に気づき、地域での活動が住民の手によって意識的に行われることで地域の持続的維持に繋がるから。

地域とは何か、地域おこしとは何か。それらの問いに対して、答えを出すことが重要だとは考えていません。むしろ、その問いを追求し続け、様々な仮説を立て、多くの人を巻き込んで地域社会に対して主体的な取り組みができる人を増やすことの方が重要な気がしています。そういった意味では、私たち4名が任期終了後も市内に定住するという道を選び、さらにそれぞれのやり方や形で地域に主体的に関わり続けて行こうという意識を私たち自身が持つことができたことが、本事業の大きな成果の一つであったかもしれません。

自己PR 得意分野やアドバイザーの抱負

地域に溶け込み、外部者の目線を活かして既存の地域資源に付加価値を付けて発信することができます。また、地域住民の関心・得意分野やモチベーションを対話等の手法を用いて引き出し、多角的な視野で地域コミュニティの在り方を捉えたり、住民一人ひとりの地域社会への主体的な関わりを促すことを、場づくりを通して実践します。

事業実施自体を目的とするのではなく、地域としてどのような未来を見据えて進むのか、そのために各事業がどのような意味を持つのかということを考え、未来づくりに取り組みます。

現役の協力隊員などへは活動の中で短期的・長期的視野でより多くの人を巻き込むということを念頭に置きつつ、協力隊の3年の経験を活かした関わりをしたいと思っています。